修士論文要旨

自己開示の抑制と自伝的記憶の概括化の関連

The Relationship between Inhibition of Self-disclosure and Overgeneral Autobiographical Memory

小宮山　みなみ（Minami Komiyama）　　指導：根建　金男

問題と目的

自己開示とは，自分自身に関する情報を他者に言葉で伝えることであり，開示欲求があるにもかかわらず，開示を抑制することは，精神的に悪影響を及ぼすことが示されている（Pennebaker, 1997）。このように開示を抑制する要因のひとつとして，経験した出来事を整理し，言語化する個人内処理の困難さがある（山本ら，2004）。これには，過去の出来事や経験に関わる自伝的記憶が詳細に想起されない現象である，自伝的記憶の概括化が，影響を与えていると考えられる。しかし，両者の関連について実証した研究は見られない。そこで，本論文では，研究１において自伝的記憶の測定ツールであるSentence Completion for Events from the Past Test (SCEPT, Raes et al., 2007) の日本語版を作成し，研究２・３において，自伝的記憶の概括化と自己開示の抑制の関連について，調査研究と実験研究によって検討した。

研究１

【方法】 大学生247名を対象に質問紙調査を実施した。調査用紙は，①日本語版SCEPT原版，②抑うつ傾向を測定する日本語版BDI-II（小嶋・古川，2003），③反すう傾向を測定する日本語版VARS（Visual Analogue Rumination Scales），④開示の回避に関する項目で構成した。また，再検査信頼性の検討のため，大学生　69名に対して，１か月の間隔をあけ，日本語版SCEPTを２回実施した。

【結果と考察】 相関分析の結果，pOGM（概括的な記憶の割合）とVARSとの間に有意な正の相関がみられ（r=.17, p<.05），t 検定の結果，概括化高群の方が低群に比べて，有意にBDIとVARS得点が高かった（$t(53)$=2.17, p<.05, $t(53)$=1.94, p=.06）。再検査においては，１回目と２回目のpSM（具体的な記憶の割合），pOGM得点に中程度の正の相関が見られた（r=.59, p<.01, r=.39, p<.05）。また，十分な評定者間一致度が得られた（W=.85）。以上の結果から，日本語版SCEPTの妥当性・信頼性は概ね支持された。

研究２

【方法】 大学生208名を対象に質問紙調査を実施した。調査用紙は，①日本語版SCEPT，②日本語版BDI-II，③日本語版VARS，④開示の抑制傾向を測定する抑制的会話態度尺度（河野，2000），⑤ソーシャルポート尺度（和田ら，1993），⑥山本ら（2004）の開示の抑制要因尺度の“自己保護”，“明確化の困難さ”，“意識化の回避”因子，⑦普段の開示に関する項目（森脇，2005）によって構成した。

【結果と考察】 BDIを制御変数とした偏相関分析の結果，pOGMと“意識化の回避”得点との間に有意な正の相関が見られた（r=.20, p<.05）。また，重回帰分析の結果，pOGMが強まるほど，“意識化の回避”得点が強められていた（β=.20, p<.05）。また，“明確化の困難さ”得点が強まるほど，有意に抑制的会話態度得点が強められていた（β=.21, p<.05）。これらの結果から，自伝的記憶の概括化が，個人内処理に関わる抑制要因に影響を及ぼすことが示された。

研究３

【方法】 開示の高抑制群（High Inhibition Group : HI群），と低抑制群（Low Inhibition Group : LI群）を対象に実験を行った。１回目は，日本語版SCEPTと，概括化と関連する実行制御機能を測定するOSPAN（Operation Span Task）を実施し，ネガティブあるいはポジティブな出来事について，親しい人に話す場面を想定し，５分間開示を行わせた。開示前後に，気分状態に関する尺度（気分調査票（坂野ら，1994）の４因子，短縮版POMSの１因子，STAI日本語版（清水・今栄，1981））を実施し，開示後にはエピソードの質等について問う質問紙を実施した。２回目は，最後に10分間のインタビューを行った。開示内容は，言語分析と第３者による印象評定を行った。

【結果と考察】 LI群より，HI群の方が，有意にpOGMが高く（$t(17)$=2.28, p<.05），言語分析の結果，ネガティブな出来事に関する洞察・受容表現が少なかった（$F(1, 17)$=8.79, p<.01）。これらとインタビューの結果を合わせると，HI群には意識化を回避する傾向があり，それが記憶の精緻化を妨げ，記憶の概括化が促進され，開示が抑制されるというメカニズムが示唆された。

総括的考察

自伝的記憶の概括化という新たな開示の抑制要因について実証した本論文の知見は意義深い。本論文の結果から，概括化の緩和を標的とする介入が，適応的な開示を促進する可能性が示唆された。今後は，概括化の緩和に有効であるとされる認知行動的介入等の介入研究が求められる。